



運行管理のあり方に向けて

NPO法人ヘルスケアネットワーク

副理事長 作本 貞子

コロナを機に、生活様式やビジネスのあり方が随分と変わりました。物流では、「ロボットの活躍」や自動運転、さらにICT(情報通信技術)等が新時代の物流のあり方として期待されるのですが、現場サイドの感覚としては、その道りはまだまだ遠いように感じられます。

さらに、労働時間や働き方を見つめ直す「2024年問題」がいよいよ来年と迫る中、ドライバ

ーの労働環境や身体への負担が少しでも緩和されればと、新年に際して心新たに願うものです。

●健康データの活用を健康起因事故が急増する中、各企業においても、「ドライバーさんの健康があればこそ」と

いう考え方がようやく浸透してきました。しかし、その取り組みを垣間見ると、残念ながら身体の基本となる健診結果や

リアルな健康データが十分に生かされていないように感じられます。そしてその弊害の理由

すべき運行管理、つまり点呼でこそ活用されなければなりません。

●点呼時には基礎疾患の把握を本年より遠隔点呼が一部可能となり、点呼の多利用が進みつつあります

これらの情報はフル活用していただき、点呼の精度アップにお役立てください。

●運輸ヘルスケアナビシステムのサポート 今後の運行管理のあり方を考えるとき、「安全+健康+働き方」のミックス版、つまりビッグデータの活用は不可欠です。安全の背景には健康

と考えられるのが、「個人情報」への誤解です。健診結果などの個人情報

は、総務・人事のみの管理下で保管され、そのまま「封印」されている事業者さえもあるようです。健康情報は管理部門のみならず、安全を死守

と考えるのが、「個人情報」への誤解です。健診結果などの個人情報

は、総務・人事のみの管理下で保管され、そのまま「封印」されている事業者さえもあるようです。健康情報は管理部門のみならず、安全を死守